

下川市街地区

(北海道下川町)

- 計画期間 平成24年度～27年度
- 面積 488.8ha
- 交付対象事業費 674.2百万円
- 町人口 3,507人(地区内人口2,850人)

ポイント 市街中心部を低炭素まちづくり計画区域に定め、コンパクトなまちづくりを推進し環境に係る取組と連携・連動した「まちな顔づくり、にぎわいづくり」を目指す。

地区概要 豊かな森林資源を活かし、持続可能な循環型森林経営を基盤に森林整備を行ってきた。国の環境未来都市に認定され、その取組と連携・連動したまちづくりを進めている。

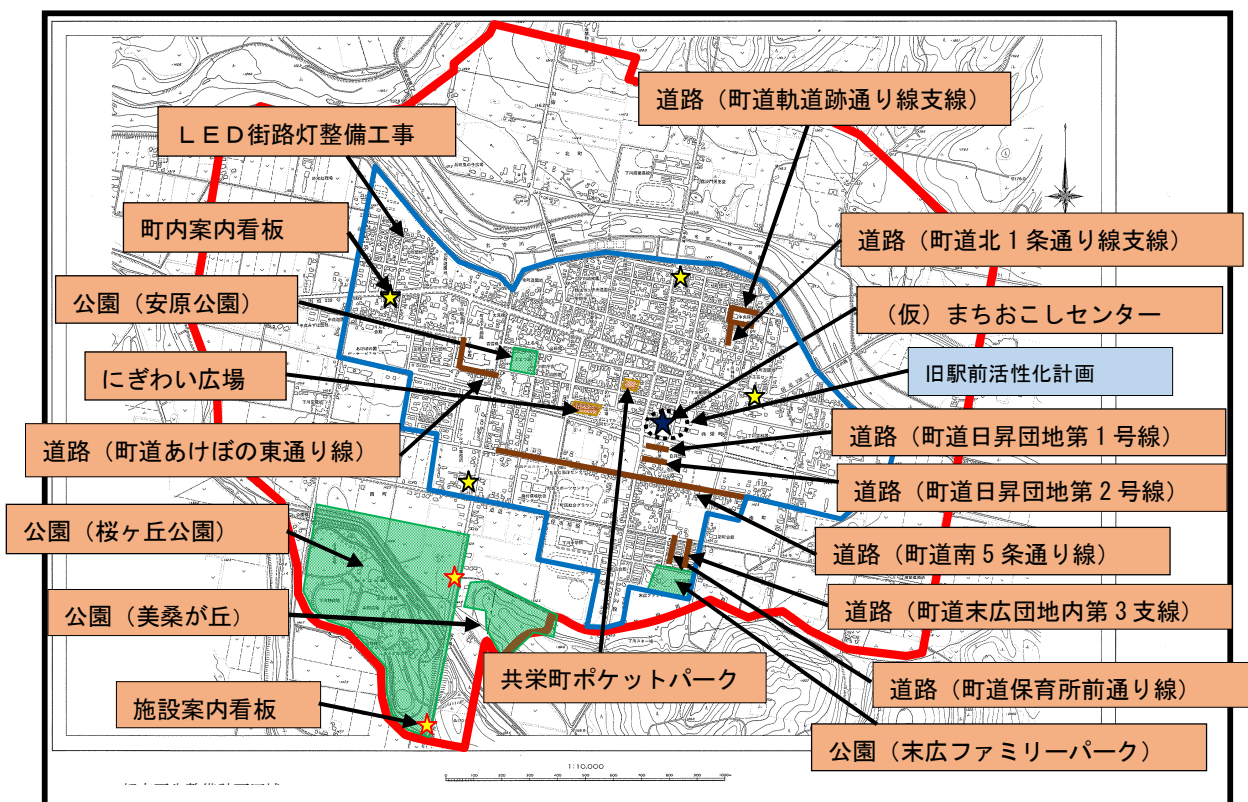
目標 森林(もり)とぬくもりに抱かれた、にぎわいとうるおいのある街

- ・ 森林(もり)のまちにふさわしい下川の顔となる市街地のにぎわいづくり
- ・ 森林(もり)とぬくもりを感じるみどりの拠点とネットワークづくり
- ・ 森林(もり)とともに生きる環境共生のまちづくり

指標 市街地を訪れる観光客の減少の抑制、地域住民活動の参加人数の向上、周辺・地域環境の満足度で「近くの公園・広場」の満足度の向上を目標とした。

市街地の観光入り込み客数	14,100人(H22)	→	14,100人(H27)
地域住民活動の参加人数	720人(H22)	→	760人(H27)
町民の周辺環境の満足度	30.3%(H22)	→	35.0%(H27)

事業内容 基幹事業(671.2百万円) → 道路(8路線)、公園(3カ所)、地域生活基盤施設(ポケットパーク、町内案内板、施設案内板)、高次空間形成施設(LED街路灯)、高次都市施設((仮)まちおこしセンター1カ所)
提案事業(3百万円) → 旧駅前活性化計画策定事業



地区の現況と課題

・豊かな森林資源を活かし、持続可能な循環型森林経営を基盤に森林整備を行ってきた。国の環境未来都市に認定され、その取組と連携・連動したまちづくりを進めている。市街中心部を低炭素まちづくり区域と設定し、コンパクトなまちづくりと緑の拠点の公園整備などを進めることで、大幅なCO₂吸収・排出削減を図り、環境負荷の低減を目指す。

・かつての駅前周辺は、JR名寄本線の廃止以降、地域の衰退が進んでいる。再びかつてのにぎわいを取戻し、新たな下川の顔となる交流・活動の拠点を整備し、地域の活性化を図る必要がある。

提案事業の特徴

旧駅前活性化計画策定事業

JR名寄本線の廃止以降、衰退がはじまり空き店舗が目立つ旧駅前に、かつてのにぎわい空間を取戻す事を目的とし、新たな下川の顔となる交流・活動拠点として「まちおこしセンター」を整備するにあたり、旧駅前周辺の活性化を図る具体的な展開を示す計画を策定した。

計画策定プロセス

・第5期下川町総合計画策定に係るアンケート結果、ヒアリング調査結果に基づき必要な課題を整理し対応する事業を検討した。

・旧駅前周辺活性化計画策定及び（仮）まちおこしセンター整備については、「都市計画審議会」に意見を求めるとともに「町民会議」を設置し、町民との意見交換を踏まえ事業を進めている。

下川町 安斎 保町長のコメント

下川町は豊かな森林資源に囲まれ、森林で収入を得て、森林で学び、心身を健康に養い、木々に囲まれた心豊かな生活を送ることのできる町を目指しています。低炭素まちづくり計画では、環境負荷の低減を目指すと共に、森林の町にふさわしい顔となる交流・活動施設（仮）まちおこしセンターを整備して、環境未来都市の取組と連携したまちづくり、にぎわいづくりを進めることとしています。今後も、まちづくりの主役である町民のみなさんと意見を交換しながら、下川町にふさわしいまちづくりに取り組んでまいります。

旧駅前活性化町民会議の

濁沼 英正会長のコメント

かつてJR駅舎がありにぎわいがあったこの地域に新しい「町の顔」として、まちおこしセンターを整備することとなりました。

「元気な地場産業に下支えられたぎわいと活力のある中心市街地の形成」を基本理念とし、「交流」「産業」「情報」の3つの拠点を創出し、森林のまちにふさわしい施設を目指すこととしています。

旧駅前活性化基本計画を策定し、今後においては、センターの設計を行う上で、さらに町民の意見を組み入れ、より良い施設になるよう話し合いを進めていきたいと思ひます。

新しい施設が出来上がり、その施設を中心として市街地に活気とにぎわいが生まれ、森林のまち下川町として更なる発展したまちづくりに取り組んでいただきたいと思います。



▲桜ヶ丘公園 木製遊具



▲狹隘道路改良



▲美桑が丘（公園）



▲旧駅前町民会議ワークショップの様子



▲（仮）まちおこしセンター整備